

コロナ禍で変わったこと・変わらないこと

じびき あや
地引 綾

(薬学部助教)

「ママー、きょうはなんさつー?」「んー、今日は2冊かなあ。」「えー、3さつがいいなー」

これが我が家の毎晩の儀式だ。5歳の長男に毎晩絵本を数冊読み聞かせて寝かしつけている。

2020年5月、新型コロナウイルス感染症の不安が大きくなっていく中で私は次男を出産し、12月まで育児休暇を取得していた。出産時は立ち会いも見舞いも許されず、その後も自粛生活が続いていた。はじめの頃は公園の子供向け遊具まで使用禁止になるほど厳しい状態であったが、それでも居住地の市立図書館は時間を短縮しながらもなんとか開館してくれていた。そこで長男は自分専用の利用カードを作り、気分のままに好きなだけ絵本を選び、借りて帰っては読んでいた。育休に入る前は平日に図書館に行くことができなかつたので、コロナ禍+育休でなければ経験しなかつた絵本との濃密な時間を過ごすこととなった。5歳児と0歳児を比べるとどうしても0歳児の成長に目が行きがちであるが、5歳児の成長もめざましいもので、絵本のおかげもあってか育休中にひらがな、カタカナの読み書きがほぼできるようになった。私はもう記憶にないが、紙に書かれた記号のようなものだった文字が意味のあるものになった瞬間、どのような気持ちになったのだろう。彼にとって新たな世界が生まれたのだろうか。

一方コロナ禍は確実に私たちに新たな世界への変化を迫り、私の育休中に世の中はあっという間にオンライン社会に変わった。不慣れながらもWebexやZoom等のWeb会議システムを使用することにより、自宅から様々な所につながる事が出来るようになった。新しい卒論生が配属される秋頃からは共同研究先のミーティングにオンラインで参加し、普段なら子供が小さいうちは参加を諦めざるを得なかつた学会にも参加することができるようになった。今しかない子育ての時間を大切にしたいと思う一方で、研究や最新の知識から離れることの不安も大きい。少しでも社会とつながっている実感を持てたことは、それだけでとてもありがたいこ

とだった。オンライン会議が終わった後の、重い扉が閉ざされたような自宅の静けさを、今でも覚えている。メディアセンターも電子ジャーナル等を大学外からアクセス可能にしてくれていて、私は自宅で育児をしながらも研究室にいた時と同様に様々な論文をダウンロードすることができた。さすがにじっくり読むことはままならなかつたが、時間が空いたときに調べ物をして、育休終了に向けた準備をすることができたため、大変ありがたかつた。オンライン化により、忙しいながらも充実した育休生活となった。長男を見習って、私も育休中に英語がすらすら読み書きできるようになっていたらもっと良かったのだが。

コロナ禍が終息しても、これまでの生活様式にそのまま戻ることはないと思っている。当然ながら子育てが終わるわけでもない。子育ても研究活動も、今しか出来ないことがある。コロナ禍は、直接会ってコミュニケーションをとることが人間にとって大切な活動だったのだと感じる機会にもなったため、例えば大学において学生と直接議論したり交流したりすることは以前のように戻していきたいが、それ以外のオンライン化については、現在の利便性を維持しながらぜひ継続発展して行ってほしい。インターネット環境とやる気があればいつでもどこでも誰でも学び、活動できるようになってほしい、と私は願っている。

さて、最近では1歳2ヵ月になった次男も絵本に興味を示すようになり、かつ意思表示がはっきりしてきた。「だるまさん」シリーズの絵本がお気に入りのようで、一生懸命に絵本を引きずってきて、私の前に「ん！」と突き出してくる。「だ・る・ま・さ・ん・」と読むと一緒に「が！」などと言うようになり、ページをめくるたびにけらけらと笑い、一段と読み聞かせが楽しくなってきた。1日の大半を保育園で過ごす息子たちだが、1日の終わりに母の声を聞いて安心して眠ってくれるのであれば、読み聞かせは私にとって最高のご褒美タイムであり、明日の自分の頑張りの原動力になるのである。